

きゅうりの声を 聞いてごらん

作家・エッセイスト

森 久美子

◆あふれる想い

六年前から、札幌のコミュニティ放送局FMアップルで「北の食物研究所」というラジオ番組のパーソナリティを務めている。「北海道の大地から元気をもらおう」をキャッチフレーズに、毎週、さまざまなゲストをお迎えして、食と農業に関するお話をうかがう番組だ。

◇

放送を前に、ゲストの方が必ずおっしゃることがある。

「二時間も持つかどうか。話すことがなくなったらどうしよう」

学校の講義やご講演等で、大勢の人の前で話すことの多い方も、マイクの前で一時間という、いつもと違う緊張感があるという。実際は十五分おきに

音楽がかかるし、私が質問する形で進行するので、お一人で話す時間は割と少ない。放送が終了し、スタジオの外に出た途端、ありがたいことに異口同音に言ってくたやる。

「二時間というのは、あつという間ですね」

みなさんがそれぞれ北海道に、農業に、あふれる想いがあるのだから、一時間で足りるはずはない。

◇

毎週違う切り口で勉強をさせてもらえる私は、本当に幸せだと思う。取材、打ち合わせ、その回ごとに参考資料を読み、本番に臨む。対談集にする際には、その内容を何度も読んで校正する。繰り返し確認する作業のおかげで、勉強したことを忘れないですんだ。



森 久美子 (もり くみこ) さん

作家・FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ

札幌市生まれ

1995年 朝日新聞北海道支社主催「らいらっく文学賞」入賞（作品は、開拓時代の農村の少女を主人公にした小説「晴天色の着物」）以来、多くの連載を持つ。

2002年 第8回ホクレン夢大賞・農業応援部門優秀賞受賞

2004年 農業土木学会賞・著作賞受賞

現在の仕事と公職など

- ・FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ（社団法人 北海道土地改良設計技術協会提供。99年から毎週「食と健康」をテーマに対談。企画・構成も）
- ・北海道教育委員会「子供の食生活を考える研修会」の講演とシンポジウムコーディネーター（2000年より）
- ・札幌開発建設部「未来へ残そう緑の大地～時代を担う子供たちに残す豊かな農業農村を考える女性会議」委員長
- ・北海道土地改良事業団体連合会・21世紀土地改良区創造運動表彰選考委員
- ・NPO法人 北海道田園生態系保全機構理事
- ・北海道教育大学岩見沢分校 非常勤講師など

農作業、農村景観、自然との共生、バイオマス、食生活指針、食農教育など。この番組を通して学んだことが、主軸である文筆の仕事をしていく上でも、大きな力となっていると思う。

◆「いただきます」の意味を知った夏休み

ラジオだけでなく、講演や文筆の仕事でもいつも省みる、私にとつての食の原点は、小学校時代の夏休みのできごとだ。

◇ 毎年夏休みの数日間を、秩父別にある母の伯父の農家で過ごした。走り回って汗をかき、髪が額や首にへばりついて、畦にたたすんで青々とした稲が風にそよぐ風景を見ていると、さわやかな気持ちになれた。十歳の夏、二ワトリを追いか

けて遊んでいたら、おじさんがその中の一羽を捕まえて言った。

「鍋にして食べさせてやるよ」

精一杯のごちそうをしようと思ってくれたのだらう。しかし私は、お鍋を食べること、二ワトリをしめることがまったく結びついていなかったから、おじさんの行為に驚いた。首を切られ、胴体だけになった二ワトリがしばらく走りまわっているのを、立ちつくし、泣きながら見ていた。

◇ その晩、私は恐る恐る鶏肉を

口に運び、「おいしい」と思った。追いかけて遊んだ二ワトリを、食べることができたのだ。人は他の生命をもらってしか生きられない。子供ながらにそのことに気づき、また涙がこぼれた。

人は動植物の命をいただいで生きている。どうしようもないその現実を、十歳の夏に知るこゝろでできた私は、とても幸せだと思う。

◆きゅうりの声を

聞いていたら

私の子どもたちにも、「いただきます」の意味がわかるような経験をしてほしいと思っていた。夏休みに、ラジオ番組がご縁で知り合った農家民宿に行った二男は、いい経験をさせてもらったようだ。

◇ 「お母さん、キュウリが」料理して「って言う声が、聞こえなかったの？」

キュウリのサラダをひと口食べた二男は、不満そうに言った。四年前の夏、当時小学五年

生だった二男は、夏休みの一週間を後志地方にある農家民宿で過ごして帰宅した。その夜のこゝろだ。

「キュウリの声」ってなんだろう。材料のキュウリが買ってから数日経ったものと、なぜ彼にわかったのか不思議だった。

◇ 二男を何度かその民宿に連れて行ったことがある。「夏休みになったら一人で働きにおいで」とおじさんに言われた彼は、親の心配をよそにアルバイト(?)に行ってきたのだ。

生まれて初めてもらった二千円のお給料を、誇らしげに見

せながら二男は話す。彼の仕事は、四匹いる犬の散歩、お膳立てとお茶碗洗い、お風呂掃除。野菜を畑やハウスからとってくる手伝いもしたという。

「キュウリをもぎに行くとき、おじさんに言われたんだ。」「わたしをもいで」って言っているのを見つけないって。でもほくは、キュウリに耳を近づけても声が聞こえなかった。そして、まだもいだらダメなのをとってしまつて、「修業が足りないから、来年もまた来なさい」って、おじさんに言われたよ。」そして彼はこう付け加えた。

◇ 「農家の人ってすごいよね。野菜の音が聞こえるんだよ。」

子どもにもわかる言葉で、農作物の生命を感じ取ることの大切さを教えてくださいました。





スタジオ風景

おじさんに頭が下がる。こんな経験のひとつひとつが、きっと子どもたちに「いただきます」の意味をわからせてくれるはずだ。

子どもたちが農業体験の中で感じたことを、とれだけ自分のこととして捉えられるかは、教えてくれる農家の方々の表現力によるところが大きいように思う。



農作業を見せてもらったり体験させてもらったりするだけでなく、土づくりから収穫するまでのプロセスとストーリーを、作物を手にして直接話してもらえたら、ありがたい。都市から訪れた大人も子どももよりよく理解できて、農業の大切さに気づくだろう。

そして同時に、私たちには聞

こえない作物の声を聞き取る農家の方々のすばらしさに、あらためて敬意と感謝を抱くことができる。

厳しい農作業のスケジュールの中で、体験を望む者たちを受け入れるのは、大変なご苦労だと思う。しかし、現代の子どもたちの生命に対する思いやりのなさや生きる意欲の希薄さは、家庭の力だけではどうしようもないところまできている。次代を担う子どもたちの食農教育に、農家の方々のお力を貸していただきたいと願っている。

あの日二男に、キュウリの声を聞く能力がないからサラダがおいしくないのだと言われ、私はシュンとしてしまった。以来、野菜はいつも新鮮なうちにいただいている。